

NEWSLETTER NO.18

水害に襲われるミャンマー マウビン・タウンシップ事業地訪問

CWS Japanでは給水プロジェクトに続き、再びミャンマー事務所と協力し、昨年4月より味の素ファンデーションから助成を受け、3年間の栄養改善支援プログラムをエーヤワディー管区マウビン・タウンシップの村々で開始しました。そして、この11月にCWSアジア地域の水・衛生プログラム担当者がミャンマーに集まり、ワークショップを開催することになったのです。私もCWS Japanから参加し、CWSミャンマーが村に建設した井戸を見学し、事業の進捗や地域が抱えている問題等について、村のリーダーや母親達からお話を聞く交わりの時を持ちました。

マウビン・タウンシップは、ヤンゴンの西約80km、ミャンマー中央を流れるエーヤワディー川分流沿岸に位置する国内最大の米作地帯です。このエーヤワディー川沿いに点在する村々が昨今の気候変動の影響を受け、この数年、雨期の度に洪水の被害を受けています。この辺り一帯の村々が深刻な水害に遭った2015年、CWSでは被災した家庭にお米と安全な飲料水確保のためのセラミックフィルターなどを配布するなど、緊急支援を行いました。しかしながら、水害はその後も雨期に発生し、家屋は流され、村が水没し、その度に住民は他の土地に移住を強いられています。地域住民の多くは、土地を所有しておらず、乾期には、日雇いの農業労働者として、また、雨期の間は、川で漁をするなどして生計を立てています。住民の多くは平均月収が、MMK57,500、日本円でおおよそ4,727円とその日暮らしの生活を送って

います。その生活に水害が追い打ちをかけ、益々貧困が加速します。3日間のワークショップが終了し、私はそのままマウビンに残り、ミャンマー人スタッフと引き続き2日間、栄養改善プログラムの事業地である村々を訪問することにしました。マウビンの町から川沿いの村までは、ボートによる移動です。乾期には河岸にボートをつけられますが、雨期には浸水した村の中までボートで入っていくそうです。水量の増加に伴い、年々、河岸浸食が進み、川がすぐ家の裏まで迫ってきています。移住した同村リーダーのU Aye Hlaingさん（64歳）のお話では、20年程前から、エーヤワディー川の河岸浸食が進み、川幅がどんどん広がってい



河岸浸食が進むエーヤワディー川沿いの村
るそうです。U Ayeさんのお宅もこの20年間で9回も転居を繰り返し、その間にこれまで所有していた40エーカーの土地を全て失ってしまったそうです。

昨年从这个地域で開始された栄養改善プログラムでは、1年目に5村の中から95世帯を対象に家庭菜園と養鶏プログラムを進め、対象世帯に

野菜の種とニフトリを配布し、技術的な研修と栄養・衛生教育を提供しました。今年は、新たに別の5村から栄養不良が心配される5歳未満の子ども達を抱える93世帯を選定し、プログラムを進めています。しかしながら、水害はプログラムにも影響を与え、去年は、ほとんどの家庭菜園が洪水で流され、配布したヒヨコの多くが雨期に病気で死んでしまいました。雨期の間は、農業もできず、日雇いの仕事也没有せん。母乳を与える母親と子供達の栄養不足が心配されます。何とか雨期を乗り越えるための工夫を考え、年間を通して、最低限の必要な栄養を摂取でき、衛生面でも安全な暮らしが送れるよう支援を続けます。そんな状況の中にあっても、若い母親達は意欲的で、栄養・衛生講習会や会合に積極的に参加している姿勢がとても印象的でした。

(文：プログラムオフィサー 牧 由希子)

ドイツの大学でJCC-DRRの防災アドボカシーの取り組みを発表

2017年11月15日～16日にかけて、ドイツはボーフムにあるルール大学（Ruhr University）にて「Voices from East Asia: Civil Society Actors in Environmental Protection, Sustainable Development and Humanitarian Assistance Governance」という会合が行われ、JCC-DRR事務局として小美野が参加してきました。ルール大学はドイツ・ノルトライン＝ヴェストファーレン州ボーフムにある州立大学で、1962年に設立。西ドイツでは第二次世界大戦後、最初の大学との事。東アジア研究にも力を入れており、日本史学科も存在します。本会合のユニークさは、学術・NGO双方が集まり、それぞれの体験を共有しながら今後の議論を展開した点です。例えば、中国の市民社会と環境問題の関係性について。また、市民社会による国内問題・国際問題への関与

の仕方や、それぞれの国における政治や歴史的周辺環境による影響などが議論されました。学術的リサーチ結果に基づきながら、中国・韓国・日本の実践例とも照らし合わせて議論を深める手法は非常にバランスが取れていて、双方に学びが多い時間となりました。

日本の事例からは気候ネットのCOPパリ合意に関するアドボカシーや国内世論の喚起の仕方、JANICによる東日本大震災対応の評価とその後の動き、東日本大震災後のTOMODACHIイニシアチブの効果と今後の展望、そしてJCC-DRRの軌跡と戦略2020が取り上げられました。特にJCC-DRRが目指すアカデミアとNGOの更なる協力、そして仙台ダボス会議で主張するMIRAI（Multisector Initiative for Research, Action, and Impact）のような展望へは、多くの共感を頂きました。

「戦後最悪の人道危機」にある世界の現状を少しでも良くする為に、一つ一つ学び合い、そしてセクターを超えた協力関係を築いていく事が重要だと思っています。日本国内はもちろんですが、海外の学術界とも今後とも積極的に関わりを深めていきたいと考えます。そしてCWS Japanも関わるJCC-DRRの戦略2020の実施を更に深化させていく所存です。

(文：事務局長 小美野 剛)



打田郁恵 新事務局次長 (事務局長代行) から就任のご挨拶



今年のキーワードは「万事塞翁が馬」です。社会システムを変えていくためには、自分が見えている世界の限界を知り、物事の良しあしを早急に判断せず全体の流れを見ることが大切だと感じています。日々の業務においても、コミュニティの人々の気持ちに寄り添いつつ、NGO、研究機関、国際機関などシステムに存在するステークホルダーと対話することを同時に進めていくことが目標です。CWS Japanでの活動を通じて、支援して下さる皆様と一緒に新しい世界をできるだけ多く見られたらと思います。

(文：事務局次長 打田郁恵)

皆さま、初めまして。10月からCWS Japanの一員として活動を開始しました。今年3月からCWS Japanが加盟するAsian Disaster Reduction and Response Network (ADRRN) の東京イノベーションハブのコーディネーターとして、アジアの人道・災害分野で活躍するNGOの新規事業づくりを支援してきました。今回、そのご縁がありCWS JapanというNGOの内部で活動できることになり、非常に貴重な機会をいただいたと感じています。

現在はアフガニスタンの帰還民支援事業などを担当し、現行業務への理解を深めつつ、来年に向けて新規案件の準備を進めています。私自身は過去にBoPビジネスやソーシャルビジネスと呼ばれる分野で、日本企業が開発途上国で現地の貧困や栄養などの社会課題を解決する事業づくりをコンサルタントとして支援してきました。その経験を生かして民間企業や研究機関など、これまでNGOが連携してこなかった業界とつないで新しい視点での事業をつくりたいと考えています。